



ほっこりとおおらかな
日常づかいに
ぴったりな漆器

石川県・金沢

城崎月甫さん



おおぶりの、ぐい呑みや茶碗、湯呑み…、ほっこりとおおらかな漆器たち。日常づかいに活躍しそうなこれらの漆器は、作品と同じく、だれもが思わず笑みをかえず大柄ではがらかな雰囲気、城崎さんの手から生まれる。

今の時代、漆器はお正月のイメージになっっているが、日常の食卓に、陶器や磁器と一緒に漆器があると、いいようもない安堵感に包まれる。それでも扱いの難しさやハレの日を使うツルンとした漆特有の緊張感から、日常づかいを敬遠してしまいがち。でも、漆器には、ハレの日用だけではなく、日常用のものもある。「器は、普段使えるもの、使いやすいものを念頭につくっています。現代の食生活では、漆器だけを使うことはないのでも、陶磁器と一緒に使ってもキズを気にしたりすることなく使える、強くて丈夫なもの大切なのではないかと。」
丈夫な漆器をつくるため、手間ひまを惜しまない。原木なら1年乾燥させ、ろくろで成形する。その後、漆に地の粉を練りこんだものを塗り、乾かす。これを3回くり返した後、ろくろで磨く。再度、

漆を塗って、拭き取る作業を3回くり返す。仕上がった肌合いは、落ち着いた趣き。陶磁器ともすんなり馴染み、日常づかいに最適。食卓がほらかなになるから、不思議だ。

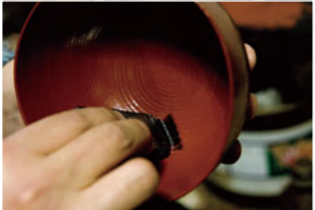
*

城崎さんが漆器づくりに目覚めたのは、地元金沢ではなく、エビの養殖を学びに行っていたミャンマーのこと。「ミャンマーにも漆器の産地があるんです。たまたま、産地であるバガンで漆器職人と友だちになって。それまで、ものづくりは、魚釣りが好きなので、ルアーをつくったりしたことはあったんですけど、それぐらい。で、現地の漆器の学校に行こうとも思ったのですが、テロなどの問題で、親が日本に帰ってこいと言うので、石川県挽物轆轤技術研究所に入ったんです。」
卒業して一年。今は、金沢郊外の山あいにある、小さな集落に自宅兼工房を構えている。訪れたとき、家の前に買ったばかりだというイチヨウの原木が輪切り

にした状態で置かれていた。まだ、ツタが絡まっている状態。年輪を数えると60〜70歳ぐらい。「これだけ生きていても、原木は安いです。一年乾燥させて板状になると高くなるんですけど。この原木も乾燥させるので、使えるのは一年後です。」

イチヨウの木は、まな板の定番になるだけあって、あばれにくく、やわらかいので刃物も傷みにくいのだとか。城崎さんは、イチヨウのほか、トチ、ケヤキ、ナラ、クリなど地元材を優先させて使っている。「本来、木が豊かな国なので、やはり身近な木を使いたいです。漆を塗らない木の器もいけれど、日本では、抗菌、滅菌作用のある漆を塗った漆器が、日本の風土に合った器として、自然だと思っんです。」
まだ、独立して一年。城崎さんの試行錯誤は始まったばかり。でも、人柄をあらわしたかのようなおおらかな漆器は、きつと日々の食卓をやさしく包みこんでくれることだろう。

十三夜ウェブマガジンより転載



tsukiho kizaki
1984年石川県金沢市生まれ。2005年ミャンマー連邦ヤンゴン外国語大学ミャンマー語学科卒業。ミャンマーで漆器に出会い故郷である金沢への想いが強まり、帰国後、石川県挽物轆轤技術研究所で本格的に漆器を学ぶ。2010年同所を卒業し、金沢市郊外の「釣部木工」で創作活動をはじめ。おおらかな人柄から伝わる温もりが、やさしくほっこりとした作品を生んでいる。